

行 動 と 行 為 の 基 礎

—— 協同講義『行動科学概論』の報告* ——

田 中 加 夫
小 牧 純 爾
佐 藤 嘉 一

*57年度前期における本講義では、各担当者による基調発言の後、担当者間での、また、いくらかは学生も加わっての質疑応答が行われた。本稿は紙数の制限のみならず、責任者（田中）の怠慢により前者の要約のみの報告で終ったが、それぞれに後者を反映させ、必要と思われた補筆や修正をも含んでいる。

I. 行為と行動の区別について（田中）

今世紀の中頃以降、ヨーロッパの各国においてとみに盛になった「行為理論」と名のる哲学的諸説がある。それらは一方では、社会（諸）科学を「行為科学」として、つまり、社会的（諸）行為の理論として探究する立場に呼応し、そこに生じてくる原理的・方法的な諸問題に答えようとしている。他方しかし、それらの一部は「行為論理学」の名のもとに提唱されており、この仕事は近代論理学のひとつの発展形態として、それに支えられ、かつ、それを支えてきた言語分析哲学の立場に立つものである。

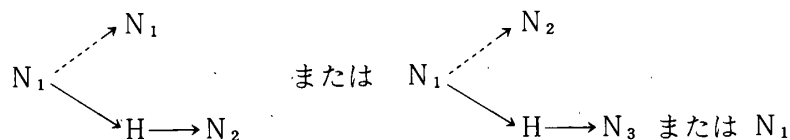
両者はともに行為という、ある種の特別なふるまいが、少なくとも人間には可能であることを前提にしており、いいかえれば、それを行動と呼ばれる別種のふるまいから区別しているものと思われる。このことは、われわれの常識的な用語法とも合致するようではあるが、以下、とくにこれらの諸説を下じきに、ないしは手がかりにして、行為の概念がどのように、あるいは、どこまで行動の概念から区別できるものかを考えてみたい。

(1) まず、この区別を有意味であるとするについて、言語分析哲学、ないしは、その源流である論理実証主義の立場を支持することにしよう。この区別のためには、なにか経験的に検証可能な然るべき二様の事態が、これら両概念のそれぞれに対応するものとして指摘できなければなるまい。より単純化していえば、なにか経験的に検証可能な然るべき事態の有無が、行為を行動から区別するための客観的なメルクマールとして要請されることになる。

この要請を受け入れ、同時におそらく、かの行為主義理論の立場にも傾斜している人々は、かなり共通に、次のことが確かに指摘できると考えている。——ある種のふるまいは、諸事物の〈自然状態の自然的ならざる変化〉をひき起しうる。より詳細にいえば、それが〈自然的な変化の自然的ならざる変様〉なり、それともむしろ〈遅延や停止〉なりをひき

起すこともある。

このことが実際にいえるとすれば、まず、それを行為の一般的な特徴であるとみなすことは、われわれの常識ともかなりよく合致するように思われる。こうした着想において、行為と自然状態との経過的連関は、図式化すれば、次のように理解されているわけである。（N：自然状態、H：行為。点線は自然の、ただし、実際には起らなかった経過。実線は実際に起った〈自然的ならざる〉経過。）



他方しかし、行動と呼ばれるべき別種のふるまいは、はたして自然状態の経過のなかに介入して、このような効果をまるでもたないであろうか。HをV（行動）に替えても、その図式どおりの経過的連関は、同様に一般的には成りたつとみなしてもよからう。だとすれば、行為を行動から区別しようとした上の着想は、この図式には十分に表現しきれていない別の一点に収斂することになろう。つまり、このように図式化する経過的連関のどこかに、行為のそれについては、とくに〈自然的ならざる〉といえるような何かを想定することが、その一点である。

(2) そもそもしかし、行為や行動のひき起した〈自然状態の変化〉（以後これを暫く、他のケースをも含めて広義に解する）が、それ自身の性質上、自然的でないなどとは断じていえない。いいかえれば、 $H(V) \longrightarrow N_2$ の経過は、必ず自然法則の完全な支配を受けており、逆にいえば、必然的ないしは確率的な因果連関としてのみ実現可能である。それ故、行為に関して〈自然的ならざる〉何かを求めうるとすれば、それはただ $N_1 \longrightarrow H$ の経過のうちに、つまりは、行為そのものの発動に際して働くような何かでしかないであろう。

哲学者は、その何かを端的に〈自由〉と呼び、行為をそれ故、自由に発動する、いいかえれば、いかなる自然法則によっても完全には決定されていないふるまいのように考えたがる。行為理論家たちの多くも、基本的には同様の見解を受け入れながら、実はこの〈自由〉の概念の解釈において、しだいにより禁欲的になってきている。

まず、行為も基本的には、一定の自然状態のなかで、それに促され、それへの可能な反応としてのみ生じうるという意味で、行為能力の基盤は、明らかに行動能力であると認めざるをえない。行為はそれ故、自然状態によって直接に決定されることはないにしても、それに反応する行動の機能と、その形成にかかわる諸法則の支配からは自由であることができない。わかりやすくいえば、行為者は彼の行動能力の範囲内で、できることをしたり、しなかったり、あるいは、それらのどれかをするという自由を保持するのみである。

しかも、このような自由の行使を、でたらめの、あるいは気まぐれによる選択のように

みなすことは、〈自由〉の解釈としても、同時にまた、〈行為〉の理論のためにも適切ではなからう。行為能力に行動能力を補完するものがあるとすれば、それは何よりも合理的な、ということはつまり、最適の選択をなそうとする意志の働きであろう。von Wright は、この見方をさらに進めて、意志決定の構造を〈目的実現のために必然であるような手段の選択〉とさえ規定している。

こうした見解によれば、行為の発動そのものが〈自由〉であるかどうか、つまり、 $N_1 \rightarrow H$ の経過が決定されていないといえるかどうかは、もはやけっして重要なことではない。むしろ、ふるまい一般の決定されているといわざるをえない発動のうち、ある種のそれは〈 N_1 に拘束されることから自由であろうとして、そのために、 N_2 の実現を欲することにもとづいている〉といえるかどうか、重要な論点はこれのみであるということになろう。

(3) 議論はこうして、実証主義の節度をしだいにより大きくふみ越え、あえて〈意識〉という、ふるまいの主体の内面を問うことになる。内面は当然、外からは観察不可能であるが、主体はこれを直接に意識することができるし、意識されている内面は表出されるのが普通であり、欲すれば、主体がそれを表現することも事実である。これらの事実は、ふるまいの内面に言及し、そのあり様の差異によって行為を行動から区別するための、少なくとも傍証にはなりうると、一部の行為理論家（その多くは、同時に法理論家でもあるらしい）は主張している。

こうした主張、あるいは、上記(2)の末尾の問いの前提になっている重要なことは、行為をたんに voluntary なふるまいと解するのではなく、それが同時に cognitive な機能をも含むとする着想であろう。後段はつまり、行為の主体が、まずは確かに $N_1 \rightarrow H \rightarrow N_2$ の経過を認知している、より適切には、それを予知しているということである。この見方はしかし、行動についても同様に成りたつといえないわけではない。ただし、それは行動の主体が、 $N_1 \rightarrow V \rightarrow N_2$ の経過を予知しているということ以上には拡張されないであろう。

これに反して、かの $N_1 \rightarrow H \rightarrow N_3$ または $N_1 \rightarrow H \rightarrow N_1$ の図式は、行為の主体が実際に起ったこの経過とともに、実際には起らなかった $N_1 \rightarrow N_2$ の経過をも予知しえていることを表現しようとしている。同様に、 $N_1 \rightarrow H \rightarrow N_2$ の予知も、行為の主体の予知であるかぎり、必ず $N_1 \rightarrow N_1$ の予知を明確にともなうものと解することができよう。このような予知の範囲の拡張が、行動についてはたふんできないとするか、あるいはむしろ、そこまでの予知を承認するには、証拠が不十分であるようなふるまいを行動と呼ぶことで、行為と行動の両概念は始めて操作的に区別されることになるだろう。

こうして、行動における cognitive な機能が、 $N_1 \rightarrow V \rightarrow N_2$ の経過の予知だけに留まるとすれば、その voluntary な機能は、いわば、この自然的な経過そのもののうちに〈拘束されている〉とみなせることにもなる。行動の主体が N_2 を欲することは、刺激としての N_1 への直接的な反応にすぎない、といいかえてもよからう。これに反して、上述のよう

な範囲での予知にもとづくといえるかぎり、行為の主体の意志は、確かに N_1 の持続よりも N_2 を欲する、あるいは、 N_2 よりも N_3 を、それともむしろ N_1 の持続を欲するという意味で、その名がなお必要なら〈自由〉な意志である。

(4) 重要なことはしかし、ふるまいを発動させる意志の働きのうちに、まずはこのような選択の有無を確認することだけであろう。選択的な意志は、行動においても N_1 と N_2 の間に、ある意味では働いているとみなせるなら、次に採用されるのは〈意図〉の概念である。この概念は、選択された自然状態への意志を理由にする、当のふるまいそのものへの意志を意味すると解されよう。主体の志向性のこのような分離が、さらにいえば、前者による後者の〈正当化〉の意識が、行動にはなくても、行為には明確にあるものと考えてるのである。——この見方から、さらに以下のような区別が派生的にいえることになる。

a) 行動が観察されないことは、端的に、それがなされていないこととみなしてもよい。これに反して、行為の資格が一般に認められているふるまいについては、主体がそれを意図して行わないこともあるとみなされ、そのような行為の不在は〈不作為の行為〉などとも呼ばれており、多くの場合、行為の一種として責任を問われる。

b) さらに特別な行為については、それが意図なしになされても〈行為〉のように、逆にまた、うっかりなされなくても〈不作為の行為〉のように、ある程度までは、主体の責任を問うことができるが、行動には、そのようなことは考えられない。

c) これらのことと関連して、行為（や、その不在）は期待されたり、依頼されたり、命令されたりすることができるが、行動は、このような他人への心情の対象とはなりえない。見方を変えていえば、行動は本質的に他発的であるのに対して、行為は基本的には自発的でありながら、上のような事情に促されて起るという特別な意味で、しばしば、他発的でもありうるわけである。

d) 行為（や、その不在）が期待や依頼や命令の対象でありうることから、主体のうちに義務ないしは許容の意識が生じ、さらにいえば、それは〈意図〉の設定そのものに影響するのが普通である。〈意図〉はつまり、たんなる *wollen* の意識としてではなく、それが *sollen* や *dürfen* のフィルターを通ったものとして設定されている。行動にはしかし、義務や許容の見方を適用することが、そもそも無意味であろう。

II 「振る舞い」の準備状態と完了状態（小牧）

哲学からは「行動と行為」の区別について問題の提起があった。心理学からは少し違った形で、(1)何が振る舞いの準備状態を構成するのか、(2)何が振る舞いの完了状態を構成するのが、を中心的なテーマとして話題提供を行ないたい。第一のテーマは、先の話で出された図式でいえば、 $N_1 \rightarrow H(V)$ に、第二のテーマは $H(V) \rightarrow N_2$ に焦点を合わせている。ここで、行動でも行為でもなく、「振る舞い」という用語を用いるのには理由がある。行

動と行為を含む全体を仮に「振る舞い」と一般的に指定しておき、両者を異なったものとして区別しうるのかにかかわる材料を、話題の中で提示したいという意図があるからである。

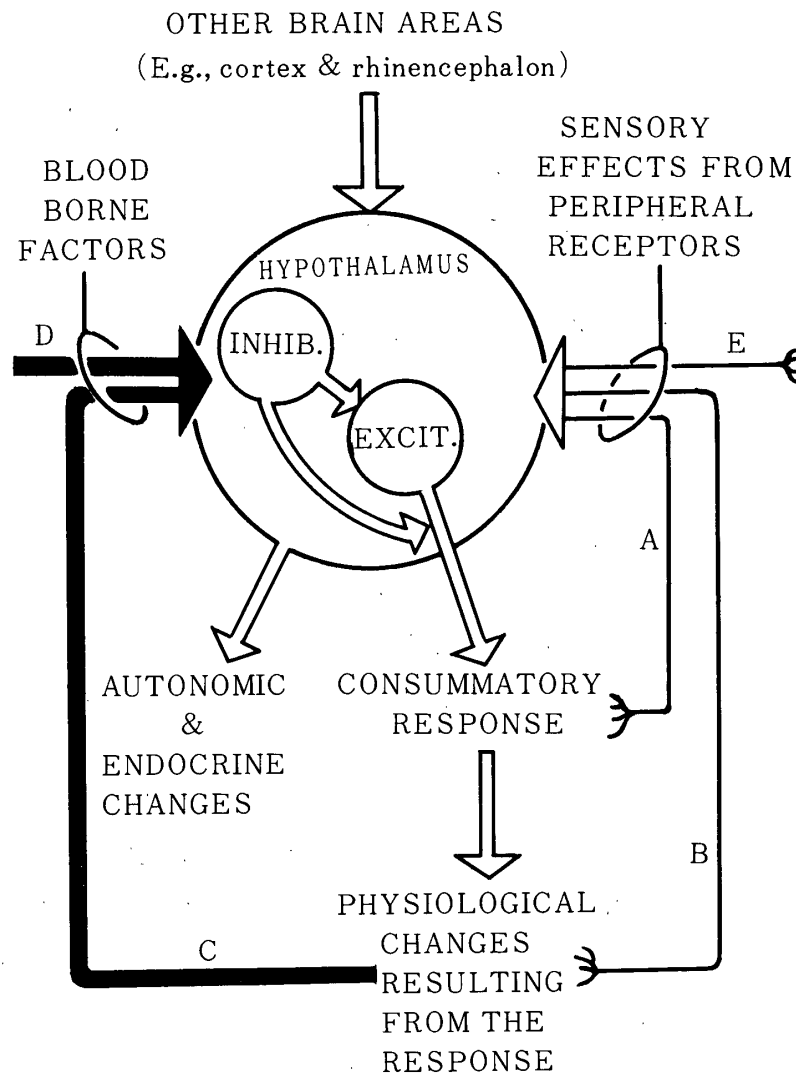
第一のテーマ「何が振る舞いの原因になるのか」という設問は奇異に感じられるかもしれない。しかし、この設問は人の振る舞いをどう見るかという観点の特色をあらわにする基本的な設問の一つであり、古典的な認知論と古典的な人間機械論とは、この設問に関して極めて対照的な立場をとったという事実がある。現在では大方の心理学者の観点は基本的な点では一致しており、それを集約すれば $B = f(O, E)$ という一般的図式で表現することができる。つまり、振る舞いには、振る舞いの主体 O と、環境 E がともにかかわっており、振る舞いは O だけでも E だけでも決らないという観点である。第一のテーマにかかわってもっと具体的に表現すれば、振る舞いの喚起には O と E がともにかかわっており、両者の力動的な関係が振る舞いの原因、または準備状態を構成するということになる。

この O と E の力動的な関係を心理学では動機づけとよぶ。そして、この関係にかかわる O の要因を動因、 E にかかわる要因を誘因と大別している。動因や誘因はあくまで総称であり、いくつもの条件が動因や誘因にはかかわっている。動機づけにはいろんなタイプが区別されているが、その主要なものを例に上げ、力動的関係、およびそれをつくり出している条件について明らかにしてみたい。

第一は、食欲、渴動因、性欲などの、ホメオスタティックな動機づけである。配布したコピーは Stellar (1954) の食欲の機構に関するモデルであり、現在広く支持されている。 O に帰属する諸条件、血液中の血糖量、動脈血と静脈血の血糖量の差など、それに E に帰属する食物の姿、匂いなどの条件が食欲を高める作用を行なう。一方、 O の条件、そして、のみ下し、胃の充実、血糖量の増加などが食欲を鎮静する働きをする。これら行動する主体の内外の条件が、多元的なフィードバック・ループをつくり、食物を求める振る舞いの準備状態を構成している。

第二の例として、探索動因、普通には「好奇心」とよばれているものをとり上げよう。下等動物でも、食欲や渴動因など、いわゆる生理的動因だけにとづいて振る舞っているわけではない。例えば、Harlow (1950) は、チンパンジーにカケガネ、フック、蝶番から出来ているパズルを与えた所、チンパンジーが特に食物報酬を与えられるわけでもないのに、このパズルに熱中することを明らかにした。何かを操作することがそれ自体として報酬になるのであり、これに対応する O の条件として Harlow は「操作動因」という動因を仮定した。類似の知見は Butler (1957) にも見られる。ボタンを押すと一定時間窓が開き、外界が眺められるような状況を設定すると、チンパンジーはひっきりなしにボタンを押して外界を観察する。しかも、この傾向は、コピーに示したグラフに見られるように、外界観察機会の与えられない時間が長いほど、強くなる。そこで、Butler は、「環境を視覚的

Stellar のモデル



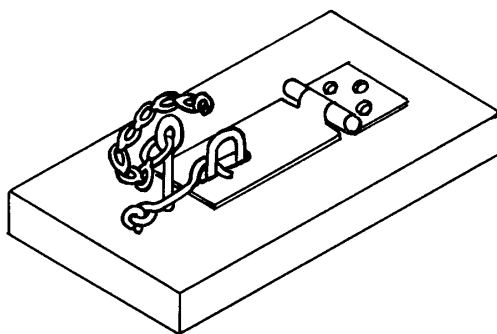
Schematic diagram of Stellar's model of the neural and physiological factors that contribute to the control of consummatory behavior associated with the primary drives. Description in text. Inhib. = inhibitory center; Excit. = excitatory center. (Modified from Eliot Stellar.

"The physiology of motivation." *Psychological Review*, 1954, 61, 5-22)

に探索する動機」を0の条件として仮定する必要があると指摘した。しかし、これらの動因または動機は、動因を喚起する刺激（誘因）が同時に動因停止機能をもつという点で、

Harlow の実験

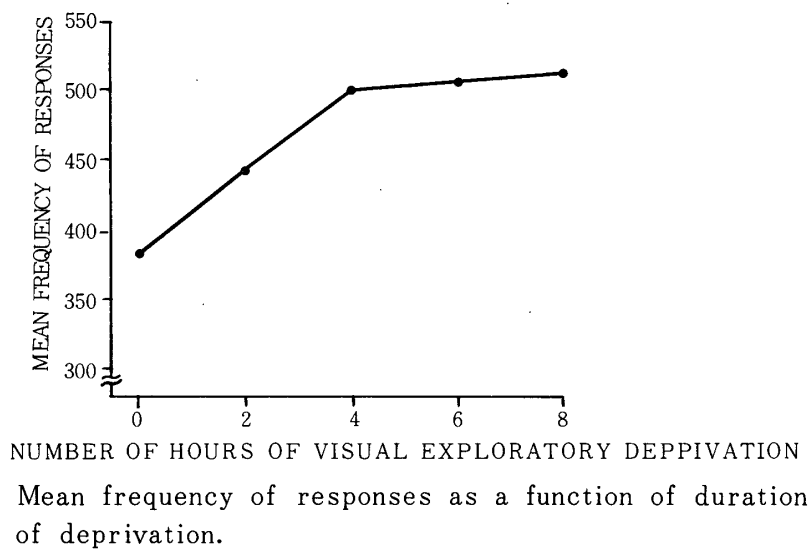
Harlow, H. F., Harlow, M. R., & Meyer, D. R. 1950 Learning motivated by a manipulation drive. *Journal of Experimental Psychology*, 40, 228-234.



Mechanical puzzle apparatus

Butler の実験

Butler, R. A. 1957 The effect of deprivation of visual incentives on visual exploration motivation in monkeys. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 50, 177-179.



例えば食欲などのホメオスタティックな動因と違っており、動機づけの統一理論を構築する上での一つの問題となっている。

社会的動機のリスト (Murray, 1938)

おもに事物と結びついた動機	獲得動機	所有物・財産を求める動機	人間の力を発揮し、それに抵抗し、または屈服することに関係のある動機	支配動機	他人に働きかけ支配しようとする動機
	保存動機	収集、修理、掃除、貯蔵する動機		服従動機	優越者を嘆賞し、進んで追随し仕える動機
	整頓動機	配列し、組織し、片づける動機		模倣動機	他人を模倣し、競争し、同意し、信じる動機
	保持動機	所有を続け、集め、惜しみ、節約し、けちになる動機		自律動機	影響に抵抗し、独立しようとする動機
	構成動機	組織し、建設する動機		反動動機	他人と異なった動作をし、独自のであり、反対の側に立つ動機
大望、意志力、達成、および威信の動機	優越動機	優位にたつ動機	他人または自己を損傷することに関係のある動機	攻撃動機	他人を襲撃し、損傷し、人を軽視し、傷つけ、悪意的に嘲笑する動機
	達成動機	障害に打ち克ち、力を発揮し、できるだけよく、かつ早く困難なことを成し遂げようと努力する動機		謙虚動機	罰を承服甘受し、自己を卑下する動機
	承認動機	賞讃を博し、推挙され、尊敬を求める動機		非難回避の動機	衝動を抑制して、非難、追放、処罰を避け、行儀をよくし、法に従う動機
	顕示動機	自己演出し、他人を興奮させ、面白がらせ、感動させ、驚かせ、ハラハラさせる動機	他人との愛情に関する動機	親和動機	友情と交友を作る動機
	保身動機	中傷されず、自尊心を失うことを避け、良い評判を保とうとする動機		拒絶動機	他人を差別し、無視し、排斥する動機
	劣等感回避の動機	失敗、恥辱、軽蔑、嘲笑を避けようとする動機		養護動機	他人を養い、助け、保護する動機
	防衛動機	非難または軽視に対して自己を防衛し、行為を正当化せんとする動機	その他の社会的動機	求援動機	援助、保護、同情を求め、依頼する動機
	中和動機	再拳報復によって敗北に打ち克とうとする動機		遊戯動機	緊張緩和、娯楽、変化、慰安の動機
				求知動機	探求、質問、好奇の動機
				解明動機	指摘、例証、報知、説明、解釈、講釈の動機

このリストは、自己の経験、行動観察、文芸作品その他の記録、あるいは専門的な面接や心理テストを通じて集められた情報、および既往の心理学的研究からの情報をまとめて構成されたものであり、人間の社会生活にとって必要な社会的動機が丹念にリストされている。しかし、現在のところ、これらの動機のうち心理学の研究対象としてとり上げられているものは半数以下である。

第三のタイプはいわゆる社会的動機であり、Murray (1938) の作ったリストをコピーとして配布した。これらの動因は上記の動因ほど系統的な吟味がなされていない。これらの動機の起源、性質、相互関係などは、まだ十分に分析されていない。

最近では、ホメオスタティックな動因、探索動因、社会的動因などを含めた、動機づけの一般理論への動向が見られる。例えば、Deci (1975) は、ゲームなどに熱中するのは、ゲームそれ自体が報酬となっており、別の動機づけが介在しているのではないという視点で「内発的動機づけ」を研究したが、そこで得られた結論をもとに、認知論的立場に立つ

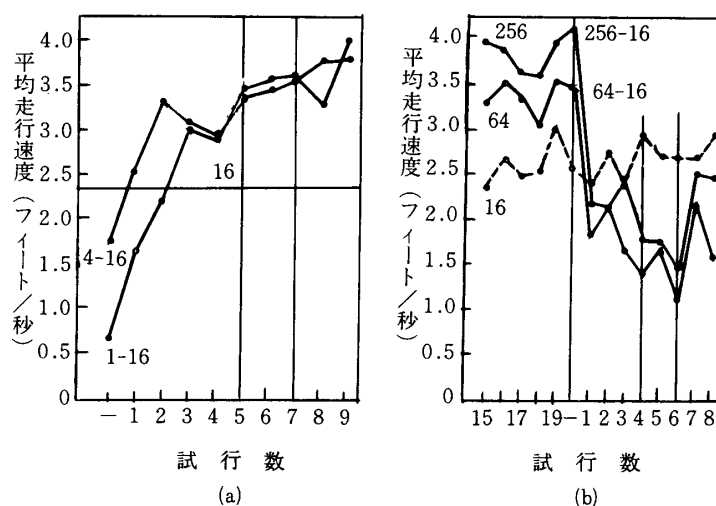
た一般理論を提起している。その内容は、Stimulus input → Awareness of potential satisfaction → Goals (Plans) → Goal directed behavior → Reward / Satisfaction という図式に集約できる。一つの試みとして注目される。

第二のテーマに入る前に重要なことを一つ指摘しておきたい。手段の問題である。振る舞いの準備状態が成立しても、目標に到達する手段がなければ振る舞いを通じての動機づけの完了はない。いわゆる欲求不満の状態に置かれることになる。

手段による環境への働きかけは、先の話で出た図式でいえば $H(V) \rightarrow N_2$ の連鎖に当る。これは、認知論の立場では意図の実現に相当し、行動論的な立場では動因の充足になる。表現が問題なのではない。何が、意図の実現なり、動因の充足なりの事態を構成するのかが重要であり、吟味すべき問題である。

振る舞いの完了状態には、その状態に関する「予測」または「期待」が成分として含まれていることは確かである。例えば、食欲をとり上げよう。食欲の充足事態に、栄養素の摂取のほかに、「どんな性質の食物をどの程度摂取できるのか」についての予測の含まれる場合があることは明らかである。コピーに示した Crespi 効果 (1942) が一つの証拠になる。報酬量を減少すると、ネズミは最初からその量で訓練されたネズミより「遅く」走る。逆に、増量すると、最初からその量で訓練されたネズミより「早く」走る。量に関する予測がなければ、こうした「対比効果」が生じる筈はない。

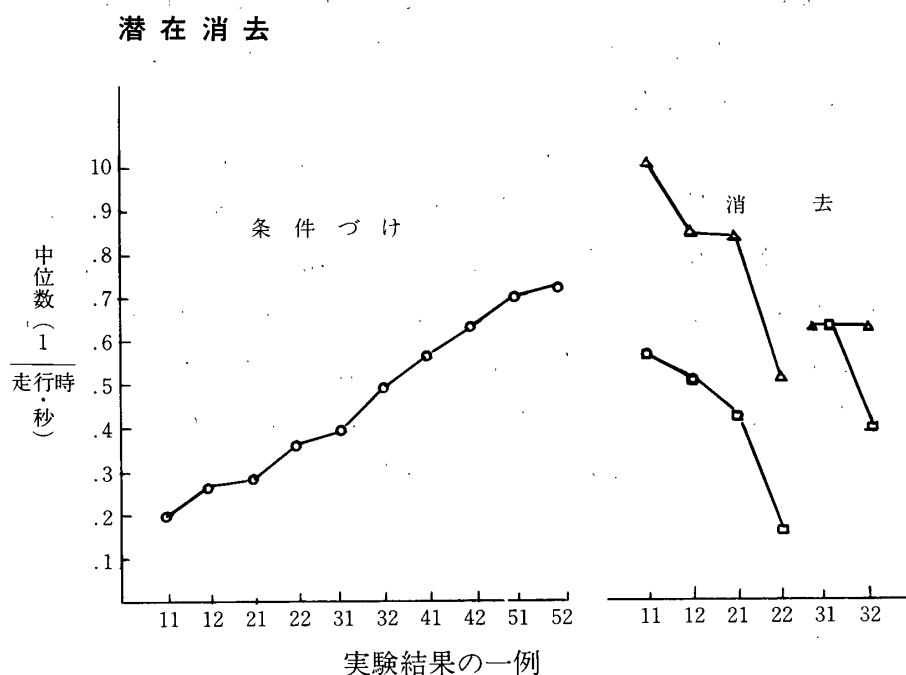
Crespi 効果



正および負の対比効果 (Crespi, 1942)

(a) 報酬量を 1 単位および 4 単位から 16 単位に増したときに生じた“正の対比効果”。(b) 報酬量を 256 単位から 16 単位に減少したとき生じた“負の対比効果”。

目標事態に関するこの種の子測が、振る舞いの中心的な役割を果していることは、別の事実から知られる。一つは「潜在消去」の現象であり、私の行なった実験のデータをコピーに示した。目標箱への走行を訓練したあとで一定時間空の目標箱へネズミを入れ、認知論的にいえば「報酬のないことを認知する」機会を与えると、次の試行からネズミの走行速度は低下する。迷路学習といった選択場面での潜在消去の機会を与えると、走行速度の低下の他に、袋路に入る「デタラメ行動」が増加する。



横軸は試行日、第1回、第2回をあらわす。

例えば21は2日目、第1回を示す。

△は統制群 □は潜在消去群

これらの例が示すように、目標事態に関する予測が存在する場合があるだけでなく、こうした予測が新たな振る舞いを動機づける場合のあることが確かめられている。ネズミの回避訓練で危険信号に対して電気ショックを回避するよう訓練したあとで、別のテストを行なう。電気ショックは一切与えない状況で新たな振る舞い、例えば「バー押し」を行なうと、危険信号が停止するように事態を設定する。回避訓練を与えられたネズミは、危険信号を避けるかのように、危険信号が提示されると「バー押し」を行なうのである。

振る舞いの完了状態に関してある種の予測が成立し、それが当該の振る舞いを維持するだけでなく、別の振る舞いをリードすることがあることは、少なくともネズミの場合でも確かである。これらの事実を前に、認知論的立場はともかく、機械論的立場も何等かの予測概念を導入せざるを得なくなった。理論改訂の試みの一つとして、例えば Spence (1956)

の rg - sg メカニズムの仮定があげられる。

次の問題は、この種の予測が関与する振る舞いの範囲である。生得的反射にこの種の予測が含まれていないことは確かである。一方、いわゆる条件反応の学習や選択行動の学習に、この種の予測が含まれ、振る舞いをリードしていることは確かである。ただし、結末（end state）への予測には、生活体の系統発生水準により、また個体発生水準により、内容に差があるだろう。また、どの程度広い範囲にわたってこの種の予測をなしうるかについても、両水準に伴うバラエティの差があるだろうと思われる。人間は生活体のなかでは最もバラエティに富んだ結末への予測を持ちうる生物であろう。思いつきに近いが、そのバラエティの一つを例示しよう。Deci（1975）が「因果性の所在」の認知とよんでい

る要因である。成人被験者にパズル解きを依頼する。一群には解いたパズルの数ごとに一定額の金銭報酬を与えるが、もう一群には一切報酬を与えない。一定数の問題を与えたあと被験者を放置し、自発的にパズル解きをやるかどうかをひそかに観察する。金銭を与えられた群にくらべ、報酬を与えられなかった群ははるかに長い時間、パズル解きを自発的に行っていた。自分の振る舞いが他から指示されたものかどうかという状況認知が、パズル解きに対してこうしたかわりを持つという点で、これは人間の動機づけを考える上で興味深い事例であると思われる。

III 行動の社会学的分析（佐藤）

人間の行動に関する社会学的分析とはなんであるか。これが以下に述べる私のテーマである。従来の社会学における行動研究の財産ストックから、(1)ダイアド論および、(2)規範並びに役割の理論の2つを引き合いに出して、このテーマについて考える。

(1) ダイアド論について

社会学者は、2人が相互に行動をやりとりすることによって成り立つ一連のなりゆきをダイアド関係と呼んでいる。G・ジンメルによるこのダイアド関係の着目以来、ホーマンズ＝ブラウの交換理論、パーソンズ＝シルズの行為システム論、ミード＝ブルーマーのシンボリック相互作用論、A・シュッツの現象学的社会学など、分析の手法をそれぞれ異にしながらも、多くの社会学者はこのダイアド関係の論理的モデル構成をもって自分たちの人間行動の社会学的分析の基礎あるいは出発点とみなしている。

社会学者がダイアド関係を社会学的行動分析の出発点とみなす理由はどこにあるのか。外見からすればモナド（単独者）の行動は、ダイアドよりも単純にみえる。しかしある個人が他の人間といかなる相互作用も行わないという事実は、よく吟味してかからなければならない。単独者の行動の特徴とみられる孤独や自由のような現象も、ジンメルがいうように、いっさいの他者関係の不在を意味しない。むしろそこにはある種の他者との相互作用が潜在している。孤独の悲痛や喜びは、失われた過去の他者関係の想起や来るべき

未来の他者関係の予期のうちに源泉する場合が多い。単独者の孤独や自由には複雑な他者との相互関係が予めビルト・インされているのである。モナドは、逆説的であるが、単純にして複雑な他者関係的現象なのである。

ここで他者関係的な人間の行動を社会的行動と定義し、そのような人間行動の研究を社会学的行動研究と名づけることにしよう。ダイアド関係はいうまでもなく社会的行動の1種である。ダイアド関係の考察は、あくまでも自我と他者という2者の要素間に作用する1連の関係形式に限定されるので、潜在的・間接的な多数の他者との相互作用を暗黙に前提しているモナドの行動について考察するよりも、方法論的には単純な社会学的行動研究になりうる。ダイアド関係がトリアド（3者関係）やそれ以上の多数者の関係形式の原基形態であり、他者関係的行動のプロトタイプといわれる理由は、この関係において自我が自我以外の他者と直接的に相互作用に入りうる条件がはじめて成立するからである。

パーソンズ＝シルズによる行為システム論は、このダイアド関係をモデル化した1例である。そこではダイアド関係は、自我の他者にたいして働きかける行動が他者にとって反応をうみだす^{キュー}合図の役目を果し、これによって今度は他者が自我にたいして働きかけを行なうという相互作用のシステムとして捉えられている。このシステムを構成する要素として重要なのは、(I)心的起動力としての^{ニーズ}欲求、(II)他者への働きかけに先行する構え（この構えとは、現時点においてやがて生ずるであろう他者の反応について予期するという、1種の解釈的先取り意識であり、^{オリエンテーション}志向範疇に属するものである）そして(III)以上の(I)と(II)を具体的な行動へと媒介するシンボル（動作とか特に言語など）であり、これらの要素は自我サイドにも他者サイドにも同様に充填されているものとして前提されている。こうしてダイアド関係は、自我の欲求充足をめぐる他者とのシンボルを媒介にした1連の構えにもとづく行動の相互交換システムとしてモデル構成されることになる。

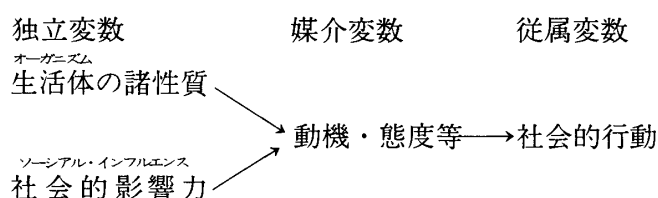
このモデルが行^{ビヘービアー}動システムと呼ばれずに行^{アクション}為システムと呼ばれる理由は、自我＝他者相互作用の成り立ちが生命体内生理過程や心理学的刺激＝反応過程に還元されず、構えという自我と他者とを媒介する機制によって選択的に規制されるという点を重視するからである。構えは、動機や価値といった志向概念の上位概念であり、行動主義的範疇の枠外にある、自我や他者による主観的な状況規定の能力に注目する構成概念である。行為システム^{コンディショニング}のモデルは、行動主義的決定論モデルであるというよりも、1種の条件次第性モデルであり、行為者が状況のなかで具体的な行動にうつる前に、状況のなかで生ずるであろう客観的事態を予め想像し、状況にたいして選択的にふるまう人間の能力に力点をおく行動の見方として特徴づけることができる。

(2) 規範と役割について

実際の社会的行動は、以上に述べたダイアド関係よりも複雑に構造化された状況のなかで生じている。T・ニューカムは、この複雑に構造化された状況下の社会的行動に関して

1つの一般的説明図式の理論化を試みている。彼の理論の1つの特徴は、心的起動力の欲求要素と状況にたいして選択的に志向する構え要素との行為主体内部における統合の局面に着目して、これを動機・態度要素として独立させた点である。

人間の行動は観察可能な事実である。同時にそれはいろいろの変数によって規定をうける従属変数である。生物学的個体 individual としての諸性質と他者との相互作用による社会的影響力、この2つの変数は人間の行動の独立変数である。しかしこの2変数は、人間の行動を直接的に規定するわけではない。むしろ従属変数としての人間の行動と以上の独立変数との間には、動機や態度等のパーソナリティ変数が介在し、これが1種のフィルター装置として機能することによって人間の行動はさまざまに屈折する。ニューカムの社会心理学的行動研究の意図は、生物学的個体としての人間にたいする社会的人格としての人間の行動が、いかに社会的影響力によって変容するかを、動機・態度の理論の彫琢によって明らかにすることにある。



ニューカム (1950) による行動の図式

人間の行動に影響を及ぼす媒介変数、パーソナリティ・動機・態度等の理論化がニューカム流の社会心理学的な行動研究の中心課題であるとすれば、社会学的行動研究の課題は、この媒介変数に影響を及ぼす社会的影響力の諸構造について解明することに存するといえよう。社会的影響力とはなにか。一般的にいえばそれは他者の影響力すべてということになるが、この他者はつねにインフォーマル・フォーマルな集団的現実を介してパーソナリティに影響力を及ぼす。この集団的現実が多様な様相を示すが、その代表的な構造として規範と役割の2つをここでとりあげる。

(A) 社会的影響力としての規範

規範、社会的規範は、さまざまな集団的状況場面で人びとの相互コミュニケーションの結果として生じ、またこのコミュニケーションを可能にする集団生活についての共有された判断基準や共通の観念を意味する。G・サムナーは規範を(I)フォークウェイズ(II)モーレス(III)法(IV)カスタム等々に分類しているが、彼が主要に問題にしたのは、人びとの実際のふるまいではなくて、むしろ人びとのふるまいにたいして望ましき Preference、許容 Permission、禁止 Proscription として共通に指示されうる、ある客観的行動規則である。サンクションないし社会統制の機能を顕在的に履行する意味図式が規範であるといつてよい。規範論のなかには、M・アージャイルのように規範発生の条件を問う、規範形成論も

あれば、サムナーのような規範分類論もある。しかし社会的行動の理論の観点からすれば、社会的影響力としての規範を論ずる場合には、規範がいかなる社会的場面や集团的脈絡において問題になっているのかに注目しなければならない。人びとの所属している特定集団、いわゆるメンバーシップ・グループの規範が問題になっているのか、非所属集団の規範が問題になっているのか、複数集団に所属する特定個人に影響を及ぼす対立的な複数規範の関係が問題になっているのか、それともより普遍的な社会成員全体の共同の福祉にかかわる根本規範（憲法など）が問題になっているのか。社会的影響力としての規範は、こうした状況のコンキストに応じて個人の行動に異なるインパクトを与えるであろう。

人びとの生活体制は、その人の現在の社会的地位並びに地位を中心にして、彼の所属集団の規範的影響力と過去及び将来の準拠^{リファレンス・グループ}集団の規範的影響力とが縦横に交錯するなかでダイナミックに編制されている。それ故以上の事態を見逃して、規範の本質や機能を一般的に論じて、社会的行動の分析にはそれほど役立つことはないのである。

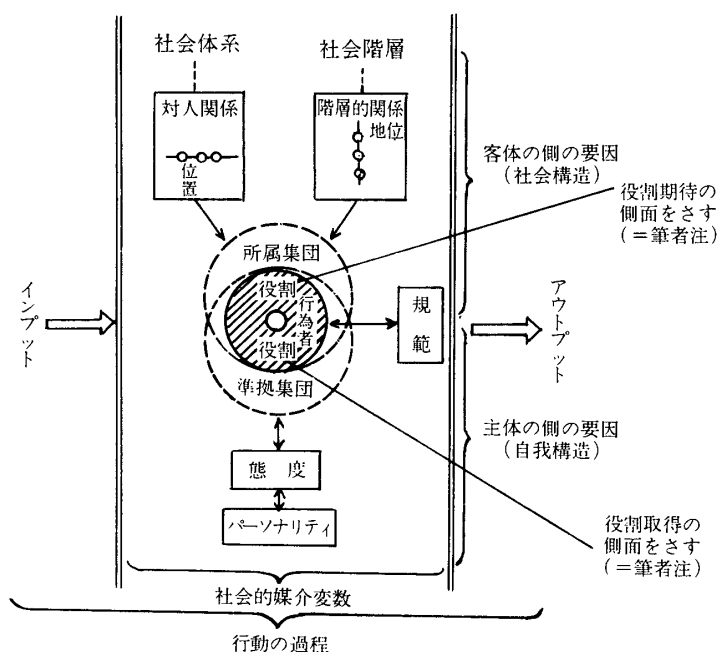
(B) 社会的影響力としての役割

人間の行動に影響を及ぼす社会構造として役割がある。役割は、役割期待 role expectation と役割取得 role-taking の2面をもつ厄介な概念である。

役割期待は、個人的な意見から独立に存在する期待、特定の集団内の地位や位置の保持者に共通に期待されている拘束力のある行動様式である。この点で役割期待は、規範と等価の機能を果している。R・ゲーレンドルフは、役割期待をその拘束力の強さの程度によって、命令期待 Muß-Erwartung、義務期待 Soll-Erwartung、奨励期待 Kann-Erwartung の3つに区別している。この命令・義務・奨励の3つの役割期待は、いずれも特定の地位＝位置の保持者による個人的な判断の恣意性の外部にあるものである。それらは個別行動の経験的な離反によっては反証されない抗^{コントラ・ファクチュアル}事^{セルフ}実的な独自の存在である。富永健一流にいえば、行為主体の側の要因ではなく、「客体の側の要因」を構成する。

これにたいして役割取得は、「主体の側の要因」を構成する。それは地位＝位置の保持者による役割期待の内面化ないしとり入れの過程に注目した概念である。俗なことばでいえば、いやいやながら面従腹背すのではなくて、自己を役割に一体化するということである。学習理論や子供の社会化といった社会心理学のテーマは、この役割取得の複雑な過程に分析のメスを入れた研究の1例であり、倫理学における責任論も役割取得論の系列に入るといってよからう。役割取得の問題は、また先ほど触れた動機・態度等のパーソナリティ論の近傍にある問題である。役割取得を介して、生物学的個体は社会的人格に変わる。役割は、役割取得として捉える限りにおいて、動機・態度等の変数とともに、人間行動に重大な影響を及ぼす主体の側の要因なのである。役割は、役割期待と役割取得という二面的性質をもつが故に、人格の主体的要因と社会的影響力の客体的要因とをリンクする。役割理論が社会学的行動論の戦略点として注目されるのは、この点にある。

以上、私たちは人間の行動に及ぼす社会的影響力の問題の一端に触れた。勿論社会的影響力は規範や役割にのみ限定されない。しかし、ヴェーバーの社会的行為の理論やデュルケームの古典的業績を改めて引用するまでもなく、人間の行動を社会的場面や集团的脈絡において論ずる場合には、規範や役割の問題に光を投ずることなしには十分な理解をうることはできない。以上の考察は、社会学を道德的事実の科学的考察であると定義したデュルケームの伝統と歩を1にしているものと信ずる。



富永健一（1958）による社会学的行動理論の図式